様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２６ 年　 ６ 月 １１ 日現在

機関番号：１３１０３
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2011～2013
課題番号：２２７３０５３６

研究課題名（和文）子どもと養育者の関係性における援助プログラムの開発と効果評定

研究課題名（英文）The development of support program and evaluation of effects for the relationships between child and caregiver

研究代表者
高橋　靖子（TAKAHASHI, Yasuko）

上越教育大学・学校教育研究科（研究院）・准教授

研究者番号：２０４６７０８８

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　1,900,000円、（間接経費）　570,000円

研究成果の概要（和文）：　本研究の目的は，AAIにより母親の内的作業モデルを測定し，主要な養育者以外の代理対象の特徴を示す。さらに，母親のIWMと幼少期の代理対象の存在，現在の夫婦関係との関連に着目し，子どもへの愛情に及ぼす影響について検討する。妊娠期および産褥期に面接と質問紙調査を実施した。AAIの獲得安定型では代理対象が存在した場合に，存在しない場合よりも新生児への愛情が高かった。新生児への愛情において，母親の抑うつ傾向を統制した上で良好な夫婦関係や代理対象の存在が関連していた。
　また、4-6歳児50名にASCTを実施しており、今後AAIと合わせて子ども－養育者の関係性を測定するツールとして使用予定である。

研究成果の概要（英文）：As the first purpose of this study, mothers' internal working models (IWMs) are classified as continuous-secure or earned-secure, or as the insecure type from AAI. The characteristics of alternative support figures (ASFs) in childhood are described. The second purpose is to examine the relationship with mothers' IWMs, existence of ASF in childhood, and current marital relationships, as well as how these variables influence the affection shown to the child. An inventory and/or an interview were conducted for 135 women in pregnancy and puerperium. The affection shown to the newborn baby was higher in the earned-secure who there were ASFs with than there weren't them with. The affection shown to a newborn baby was related to good marital relationships and existence of ASFs, after controlling for mothers' depression.
The ASCT were conducted to fifty 4-6 year-old children and will be use as the assessment of the caregiver-child relationships with AAI.

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：心理学・臨床心理学

キーワード：内的作業モデル　獲得安定型　代理対象　夫婦関係　アタッチメント

１．研究開始当初の背景

近年，児童虐待をはじめとする子どもと養育者の関係性障害について注目されている。本研究では，養育者自身の内的作業モデル（被養育体験に由来する自分や他者に関する表象）が，子どもの気質に対する養育者の認識や子どもとの関係性に及ぼす影響について検討すること，さらに関係性障害を抱える子どもと養育者との関係に直接介入する治療技法や養育者との面接技法を発展させた援助プログラムの開発を行い，その効果について検証することを主な目的とする。

２．研究の目的

愛着理論において，幼少期から成人に至る個人内の愛着の連続性と変化のメカニズムについて大きな関心が集まっている。内的作業モデル（IWM：Bowlby, 1973/1977 1980/1981）とは，発達初期の養育者との関係の中で形成される一定の認知的枠組（スキーマ）を意味し，「自分にとっての愛着対象は誰で，助けをもとめるときにはどれだけ近づきやすく，どうすればどう応答してくれるか」，「自分が愛着対象からいかに受容されているか，助けを与える人間と判断されているか」という他者や自己に関する内的表象を指す。IWM には基本的に時間的安定性が想定され，いったん形成されると可塑性を持ちにくい（Main et al., 1985）。しかし，Bowlby（1973/1977）は，幼少期に形成された愛着やパーソナリティの発達経路が生涯にわたって一本の轍となる訳でなく，各年齢における家族や家族以外，時代などの環境との相互作用によりいくつもの分岐点を想定していた。このような IWM の変容について Main et al.（1991）は，思春期・青年期の認知発達に伴うメタ認知能力や内省能力の向上が影響を及ぼす可能性を挙げている。その後，大規模な縦断研究によって幼少期から成人期までの個人内の愛着に関する連続性が検討され，一定の関連が実証されている（Waters et al., 2000 など）。Waters et al.（2000）によれば，乳児期から青年・成人期にかけての愛着の一貫性は 64%となることを示した。しかし，逆にとらえれば 1/3 程度は不一致であり，個人内の様々な発達過程や対人リソースについて検討する中で連続性および不連続性のメカニズムを解明すべきであろう。

IWM を測定する代表的なツールである AAI（Adult Attachment Interview; Main et al., 1984/1998）は，被面接者が養育者との関係をどのように振り返るかによって評定する半構造化面接であり，必ずしも応答的でない被養育体験であっても被面接者がバランスのとれた視点を持って開かれた態度で語ることができれば安定自律型（以降，安定型）と分類される。安定型の下位分類として獲得自律安定型（以降，獲得安定型）は，「非応答的な親との経験であるにも関わらずバランスのとれた視点で統合して語ることができる」タイプであり，継続安定型は「応答的で愛情に満ちた親との経験を一貫して語ることができる」タイプと定義づけられる。これまでの獲得安定型を扱った研究における操作的定義には，過去の養育者との経験に関するサブスケールである「父親／母親の愛情」，「拒否」，「ネグレクト」などの基準が多用されるが一貫していない（Fraley, 2002; Main, & Goldwyn, 1984/1998; Pearson et al., 1994; Roisman et al., 2002）。また，日本人の AAI データにおいて安定型の多さが指摘されている（数井ら，2000；高橋ら，2014）。本研究では，安定型のサブタイプである獲得安定型について注目し，各安定型の操作的定義について信頼性および妥当性の検証を行った上で，各型の特徴について明らかにしたい。

ところで，出産後の母親が情緒不安定になりやすいことが指摘され，近年は妊娠期の抑うつ傾向についても注目されている（Kitamura et al., 1993；金子ら，2008 など）。金子ら（2008）は出産前後の母親の抑うつ傾向が胎児や乳児への愛着形成におけるリスク因となることを示している。このような出産前後の母親の抑うつ傾向について，母親自身の IWM との関連が指摘されている。Pearson et al.(1994)が継続安定型と獲得安定型における抑うつと養育行動を比較したところ，獲得安定型の抑うつは不安定型と同様に高いものの，養育行動は継続安定型と同じく効果的なものであった。この結果より，過去の苦痛な愛着経験を報告する母親は，そのことを統合して語れる心的状態である場合，抑うつ的な一方で子どもを効果的に養育できることが示された。しかし，抑うつについては獲得安定型でかえって高くなるとする報告もあり一貫していない（Roisman et al., 2002）。

妊娠期から出産育児期にかけては，養育者に対して愛着を抱く側から子どもを養育する側へと大きな転換を迎え，子どもへの期待や不安を抱くと同時に，実際の関わりを通じて母親自らの被養育体験を想起する機会が増加し，親から受けた養育システムが活性化する時期である。そこで本研究は，妊娠出産期の母親を対象に IWM が抑うつ傾向および子どもへの愛情に及ぼす影響について縦断的に調べることを目的とする。

Bretherton（1987）は母親の養育行動や母子関係の性質において，母親自身の愛着人物についての IWM のみならず，自分の子ども，母親としての自分，夫婦関係等についての IWM が複合的に関連することを指摘している。また，van IJzendoorn, et al.（1992）は，イスラエルのキブツの乳児の観察より，親だけでなく親でない養育者との関係の安定性が乳児の発達の予測に有効であることを示した。そのことより，愛着関係について，主

たる養育者との相互交渉だけでなく拡大された愛着ネットワーク全体が有効に作用することが仮定される（van IJzendoorn & Sagi, 1999）。

このため，母親の IWM と子どもへの愛情の関連との媒介要因として，幼少時の代理対象の存在と現在の夫婦関係について取り上げる。幼少期の養育者と同様かそれ以上のサポート源となる対象について，alternative support(caregiving) figures として取り上げて（Saunders, et al., 2011; Zaccagnino, et al., 2012），主たる養育者以外の重要な他者（祖父母など）が，特に獲得安定型に対して果たす役割についてその特徴や子どもへの態度に及ぼす影響について明らかにしている。例えば，Saunders, et al. (2011)は獲得安定型が代理対象より過去に情緒的サポートを多く受けており，セラピーを受ける時間が長かったことを報告している。

加えて，現在の対人ネットワークより現在の夫婦関係が IWM に重要な役割を果たすと考えられる。パートナーとの愛着関係に関する研究（Crowell, 2002）では，結婚 3 か月前から結婚 18 か月後に 78%において妻の IWM は連続していたものの，一部変化を遂げており不安定型から安定型への移行が多くみられたとの報告がある。また，夫婦間の愛情やソーシャルサポートの充実が母親に対する子ども自身の愛着にも関連しており（Cowan, 1997; 数井・無藤ら, 1996），子ども自身の愛着は母親の愛情に基づいた養育態度や感受性と相互作用を持つと考えられる。以上の問題より，幼少時の主要なソーシャルネットワークとして養育者以外の代理対象，成人後は配偶者との関係を取り上げる。仮説としては主要なソーシャルネットワークの存在により，個人内で IWM の更新が生じ安定型の方向に導かれること，結果として子どもへの愛情に肯定的な影響を及ぼすと考えられる。

以上より，本研究の第一の目的として，自身の養育者に関する安定自律型の母親による語りより操作的定義により継続安定型と獲得安定型に分類した上で，信頼性および妥当性について確認する。その際に，代理対象に関する語りを抽出して有無の評定を行いその実態について明らかにする。幼少時の主要な代理対象として祖父母が想定されるため，祖父母との物理的近接についても着目する。

第二の目的として，母親の IWM と幼少時の代理対象の存在，現在の夫婦関係との関連に着目し，子どもへの愛情に及ぼす影響について検討を行う。子どもへの愛情に対する母親自身の抑うつ傾向の影響（金子ら，2008；Nagata et al., 2000）や胎児期の愛情との関連（安藤，2009）が指摘されており，抑うつおよび胎児期の愛情を統制して分析する。

このような個人内の発達プロセスの力動を理解することによって，子どもにとって発達促進的な養育環境の整備や心理臨床における援助関係の理解に資するものと考えられる。

３．研究の方法

（1）調査対象　対象者は，A 大学附属病院産科を受診した妊婦 135 名である。本研究は母親のメンタルヘルスに関する縦断研究の一部（金子ら，2008）であり，妊娠が確定した妊娠 3・4 か月時に開始して出産後 3 年までの縦断調査を実施した。そのうち，本研究では，妊娠中期調査および後期面接の調査対象者を取り上げた。縦断調査として，後期質問紙調査においては 106 名，産褥期質問紙調査においては 84 名の協力を得た（表 1）　。

表1　対象者および子どもの属性

対象者の属性（妊娠中期）		n＝135
平均年齢	30.1歳	（SD=4.3　range＝20-42）
受診外来	一般	94名（69.6%）
	不妊	41名（30.4%）
妊娠の希望	あり	78名（57.8%）
	どちらでもない	35名（25.9%）
	なし	22名（16.3%）
出産経験	初産	101名（75.4%）
	経産	33名（24.6%）
最終学歴	高校･専門学校	46名（34.1%）
	短大	41名（30.4%）
	大学･大学院	46名（34.0%）
子どもの属性（産褥期）		n＝84
性別	男子　43名（51.2%）　女子　41名（48.8%）	
出産体重	2,919g	（SD=399）
在胎期間	38.8週	（SD=1.8　range＝30-42）

（2）調査方法　口頭および書面によって調査に関する説明を行い，承諾の得られた対象者に対して，妊娠期の質問紙および面接は病院での検診前後の時間に，産褥期は入院病棟において回答を依頼した。本研究は A 大学医学部倫理委員会の承認を得ている（承認番号 173）。

（3）調査時期　妊娠中期の質問紙調査は妊娠日より平均して 128.6 日目に実施された。

（4）調査内容

①質問紙の尺度

抑うつ：妊娠中期調査および産褥期調査における抑うつの測定尺度として，Zung's Self-rating Depression Scale（SDS）（Zung et al., 1965；福田・小林，1973）を用いた。SDS は 20 項目からなる 4 件法の尺度である。

子どもへの愛情：妊娠中期調査において，胎児への愛情を測定する尺度として，Antenatal Maternal Attachment Scale（AMAS）（Honjo et al., 2003）を使用した。AMAS は 8 項目からなる 4 件法の尺度である。産褥期調査においては，子どもへの愛情を測定する Postpartum Attachment Scale（Nagata et al., 2000）の下位尺度である Core Maternal Attachment を使用したが，2006 年再調査時の因子構成（永田，2011）を用いた。

夫婦関係：妊娠中期調査において，現在の夫

との関係について測定するために夫婦関係尺度（菅原・詫摩，1997）を 7 件法 20 項目で実施した（調査途中から開始したため 116 名のみ）。

回想された親への愛情：妊娠後期調査において，小学校時の親に対する愛情の認識の程度を測定するため，回想された親への愛着尺度（佐藤，1993）を 4 件法 20 項目で測定した。「不信拒否」，「安心依存」，「分離不安」の各下位尺度の合計得点を以下の分析で用いた。

②半構造化面接

初回の妊娠中期調査の約 1 か月後の検診時に，対象者に対して Adult Attachment Interview（AAI）を実施した 。AAI は幼少期の両親あるいは代わりの養育者との被養育体験を思い出させながら，現在の評価を尋ねる半構造化面接である（Main & Goldwyn, 1984/1998）。

愛着対象に関する IWM：AAI を逐語記録に起こした後に，親との愛情的な結びつき（母親／父親の愛情），親からの拒否（母親／父親の拒否），役割逆転の有無などの“過去の愛着経験についての性質”，および親の理想化，怒りへのとらわれ，侮蔑，想起の困難，そして談話内容の一貫性といった“現在の心的状態”からなる 16 のサブスケールによって評定され，最終的には以下の４つのカテゴリーに分類される。

幼少期の代理対象の有無： AAI における祖父母の同居の有無やその関わり，親以外の重要な大人（代理対象）に関する質問への回答より，12 歳以前の大人との関わりにおいて，遊びや世話だけでなく情緒的な支え（例：家族と同然といった表現や関わりによる被影響性について言及）が認められる場合に「代理対象あり（1 点）」，認められない場合に「なし（0 点）」と評定した。

４．研究成果

（1）AAI 評定および信頼性・妥当性の検討

AAI の逐語録については第一・第二著者が独立評定を行った。両者は 1999 年にテキサス州立大学において AAI の研修を受け，2001 年に正式なコーダー資格を取得している。評定者間の一致率は 79.3%であった。不一致であった逐語録については話し合いによって一致させた。AAI の各型の分布は，安定型 100 名（74.1%），愛着軽視型 28 名（20.7%），とらわれ型 5 名（3.7%），未解決型 2 名（1.5%）となった。AAI のサブスケールの「母親の愛情」，「父親の愛情」，「母親の拒否」，「父親の拒否」，そして「話の一貫性」について第一著者と第二著者による評定者間一致率について Busch et al.(2008)を参考に算出したところ，70.0‐75.9%となった。

次に，安定型について Pearson et al.（1994）の「一貫した語りを示すものの，少なくとも父親／母親の愛情が低く（9 点満点中 5 点以下），拒否あるいはネグレクトが高く評定（9 点満点中 5 点以上）」という定義を参考に，両親どちらかの「愛情」が 5 点以下，かつどちらかの「拒否」が 5 点以上である安定型について獲得安定型と定義づけた。それ以外の安定型については継続安定型とした。以降は，継続安定型 73 名，獲得安定型 27 名，および安定型以外の型の 35 名を不安定型として 3 群を分析に用いた。

獲得安定型および継続安定型の分類の妥当性を確認するため，各群について AAI 下位尺度の得点を比較した。その結果，全てのサブスケールにおいて有意な差が認められた（表 2）。多重比較を行ったところ，継続安定型が他の型より「話の一貫性」が高く，「母親の愛情」および「父親の愛情」が有意に高く，「母親の拒否」および「父親の拒否」が有意に低かった。また，獲得安定型では不安定型よりも，「話の一貫性」が有意に高い結果を示した。基準関連妥当性を検討するため，回想された親への認識尺度の「不信拒否」，「安心依存」，「分離不安」得点について一要因分散分析を行ったところ，継続安定型は獲得安定型よりも，親への不信拒否において有意に低く，親への安心依存において有意に高い傾向を示した（表 3）。

表2　全体およびAAIの型ごとのAAI下位尺度および親の認識尺度の平均値および分散分析結果

		全体	範囲	a 継続安定型	b 獲得安定型	c 不安定型	*F*値		多重比較
話の一貫性	*M*	6.01	(1−9)	6.91	6.41	3.83	221.2	***	a>b**, c***
	SD	1.49		0.74	0.69	0.71			b>c***
母親の愛情	*M*	5.24	(1−9)	6.25	4.50	3.73	44.1	***	a>b***, c***
	SD	1.77		1.32	1.53	1.41			
父親の愛情	*M*	4.10	(1−9)	4.83	3.61	2.97	17.9	***	a>b**, c***
	SD	1.77		1.72	1.48	1.34			
母親の拒否	*M*	3.59	(1−9)	2.40	4.81	5.11	46.8	***	b**, c***>a
	SD	2.01		1.10	1.90	2.01			
父親の拒否	*M*	3.25	(1−9)	2.03	4.74	4.63	28.3	***	b***, c***>a
	SD	2.42		1.39	2.68	2.56			
n				73	27	35			

** p<.01, *** p<.001

表3　全体およびAAIの型ごとのAAI下位尺度および親の認識尺度の平均値および分散分析結果

	α係数		a 継続安定型	b 獲得安定型	c 不安定型	*F*値		多重比較
不信拒否	.858	*M*	15.41	19.90	16.76	4.62	*	b>a**
		SD	5.18	6.76	6.19			
安心依存	.872	*M*	23.20	20.45	22.38	2.39	+	a>b+
		SD	4.69	5.37	4.94			
分離不安	.675	*M*	9.67	10.75	9.96	1.09		
		SD	2.69	3.21	2.86			
n			61	20	25			

+ p<.10, * p<.05, ** p<.01

（2）代理対象の有無とその特徴

「代理対象」の有無について 39 名分（28.9%）のデータを任意に抽出し，評定者間の一致率を算出したところ 79.5%と十分な値を示した。

次に，代理対象ありと評定された 50 名に AAI の各型と代理対象の有無の組み合わせは，代理対象ありは継続 21 名，獲得 11 名，不安定型 18 名，なしはそれぞれ 52 名，16 名，17 名であった。$\chi 2$ 検定を行ったところ連関する傾向が示され（$\chi 2(2)=5.41$ $p=.068$），残差分析では継続安定型の代理対象なしがありとする人数より多く，不安定型では代理対象ありがなしとする人数より多かった（いずれも $p<.05$）。さらに，AAI の各型と祖父母との同居あるいは近接の有無について，同居・近接ありは継続 31 名，獲得

17 名，不安定 12 名，なしはそれぞれ 42 名，10 名，23 名であった。χ2 検定を行ったところ有意な連関傾向（χ2(2)=5.33，p=.070）が示され，残差分析では獲得安定型において祖父母と同居・近接していた人数が多かった（いずれも p<.05）。また，祖父母との同居・近接していると祖父母を代理対象とする割合が高まった（χ2(1)=18.75，p<.001）。

（3）AAI の型による抑うつの比較，代理対象の有無を合わせた子どもへの愛情の比較

各期の抑うつを従属変数に，AAI の型を独立変数とする分散分析を行った結果，妊娠期の抑うつ得点において有意差がみられ，産褥期において有意傾向が認められた（F(2, 128)＝2.56　p<.10；　F(2, 118)＝3.35　p<.05；F(2, 75)＝2.47　p<.05）。多重比較の結果，不安定型より妊娠期の抑うつ得点において有意に低く（p<.05），産褥期の抑うつ得点でも有意に低い傾向が示された（p<.10）。

夫婦関係，胎児・新生児への愛情尺度のα係数は，いずれの尺度も高い内的一貫性を示した。夫婦関係については天井効果がみられた 3 項目（項目 1，6，9）を除外して合計した得点を用いた。AAI の各型と代理対象の有無の組み合わせの二要因分散分析により，妊娠中期の胎児および新生児への愛情得点の比較を行った（表 4）。その結果，胎児への愛情については AAI による主効果の傾向が認められた（F(2, 125)＝2.48　p<.10）。新生児への愛情については交互作用が有意であり（F(2, 78)＝3.26　p<.05），下位検定の結果，獲得安定型において代理対象がある場合にない場合よりも愛情が有意に高く，継続安定型でも代理対象がある場合にない場合よりも有意に高い傾向がみられた。

（4）新生児への愛情に関連する変数

最後に，新生児への愛情と様々な変数間の関連を調べるために階層的重回帰分析を行った。妊娠期および産褥期の子どもへの愛情得点の相関係数が有意な正の相関を示し（r＝.563，p<.001），両期の抑うつ得点も同様であった（r＝.552，p<.001）。そのため，新生児への愛情を目的変数として，第 1 ステップにおいて妊娠期の胎児への愛情を統制変数として投入した。次いで第 2 ステップにおいて妊娠期および産褥期の抑うつを統制変数として投入した。最終ステップとして，夫婦関係および AAI における話の一貫性，母親／父親の愛情・拒否，代理対象の有無を投入した。語りの一貫性は語りの統合度を示し AAI の型における評定の決め手となり，母親／父親の愛情・拒否はいずれも養育内容を示す重要な指標である。第 2・3 ステップでは重決定係数に有意な増分が得られ，良好な夫婦関係と代理対象の存在が有意な正の関連を示した（表 5）。その一方で，語りの一貫性が愛情と負に関連しており，父親の拒否が正に関連する傾向が認められた）。VIF の最大値は 2.16 であり，多重共線性の問題は認められなかった。

表4　AAIの型と代理対象の有無による夫婦関係、子どもへの愛情、抑うつの平均値･標準偏差および分散分析結果

AAI	a継続安定型		b獲得安定型		c不安定型		主効果			交互作用		下位検定
代理対象	あり	なし	あり	なし	あり	なし	AAI		代理対象	AAI×代理対象		
尺度名	*Mean* *SD*	*Mean* *SD*	*Mean* *SD*	*Mean* *SD*	*Mean* *SD*	*Mean* *SD*	*F*値		*F*値	*F*値		
妊娠期	96.80	93.57	89.40	88.14	94.20	90.46	2.52	+	1.27	0.08		a>b+
夫婦関係	12.46	11.05	12.76	10.30	12.16	12.85						
n	20	44	10	14	15	13						
妊娠期	25.00	24.00	23.11	21.94	23.41	23.47	2.48	+	0.87	0.26		a>b+
胎児への愛情	2.86	3.67	5.53	4.71	3.50	3.34						
n	21	51	9	16	17	17						
産褥期	40.42	37.97	39.89	35.33	37.31	39.09	0.90		2.97	+ 3.14	*	b: 代理対象あり>なし*
新生児への愛情	3.96	4.29	5.16	4.92	3.77	3.59						a: 代理対象あり>なし+
n	12	30	9	9	13	11						

+ p<.10, * p<.05, ** p<.01

表5　新生児への愛情を目的変数とした階層的重回帰分析(*n*=55)

説明変数	β a)		*t*値	R^2		$\triangle R^2$	
Step1				.301	***	.301	***
妊娠期　胎児への愛情	.225	+	1.96				
Step2				.405	***	.104	*
妊娠期　抑うつ	.108		0.87				
産褥期　抑うつ	-.375	**	-2.71				
Step3				.597	***	.192	*
妊娠期　夫婦関係	.314	**	2.79				
AAI　話の一貫性	-.247	*	-2.05				
AAI　母親の愛情	.110		0.79				
AAI　父親の愛情	.156		1.13				
AAI　母親の拒否	-.205		-1.62				
AAI　父親の拒否	.194	+	1.70				
AAI　代理対象	.242	*	2.25				
(1：あり　0：なし)							
a)最終ステップにおける標準偏							
+ p<.10, * p<.05, ** p<.01, *** p<.001							

（5）考察

①獲得安定型の評定の信頼性・妥当性

次に，AAI 分類の信頼性および妥当性について確認した。本研究では不安定型と同程度に，獲得安定型における親からの拒否の高さや愛情の低さが特徴的であり，過去の親の養育態度に対する強い不信感がうかがわれた。しかし，不安定型について AAI のサブスケールでは過去の親との良好でない関係を示す一方で，自己回答による尺度では獲得安定型ほどには安定型との差がみられなかった。この理由として，理想化や忘却などの防衛的な語りまで考慮した第三者による評定と当事者の意識にギャップが生じたと考えられる。

②幼少期の代理対象の実態

代理対象の有無については AAI の型と有意な連関傾向を示し，継続安定型が他の型より少なく不安定型では多い傾向にあった。Saunders et al.（2011）は，獲得安定型が継続安定型よりも周囲から過去に多くの情緒的サポートを得ていたと報告したが，本研究では継続安定型より不安定型で代理対象が多い結果となった。不安定型が親との関係で悩む中で養育者以外の他者との関わりを求め，あるいは周囲が手を差し伸べていたと理解される。次いで獲得安定型において祖父母との同居・近接が他の型より多い傾向，同居・近接により代理対象となりやすいことが示された。主要な養育者だけでなく別の大人が生活圏内に居住することは，親とは異なる関係を構築し，子どもの情緒的なサポート役として機能する可能性が高まる。「孫育て」が盛んとなった現代の日本社会では，家族における祖父母の役割が注目されており（氏家，2011），主たる養育者だけでなく代理対象を含めた子どもとの相互作用を検討する意義

は大きいだろう。
③IWM と子どもへの愛情との関連
IWM と各変数の関連を調べたところ，AAI の型と抑うつ傾向や子どもへの愛情との間に一定の関連が見出された。獲得安定型は，抑うつについては不安定型ほどには高くないものの，胎児への愛情については継続安定型より低くなる傾向を示し，夫婦関係においても低い傾向が示された。このことは，過去の親との不遇な関係を認識する獲得安定型が，現在の重要な対人関係においても不安定となる傾向を示している。
しかし，AAI と代理対象を含めた分析からは，獲得安定型における代理対象の存在が新生児への愛情を補足していることが示された。この結果は，幼少時に養育者との問題の有無に関わらず，幼少時に親代わりとなる大人がいることで，親との関係を心的な一貫性を保って振り返ることができ，さらに次世代の子どもと良好な関係作りを行う可能性を示唆する。一方で，不安定型においては代理対象の働きが認められなかった。その理由として，不安定型では親以外の重要な他者との関わり自体が否定的もしくは両価的であることが多く，補償要因となりにくいと推測された。親の代わりとなりうる他者と自己，親と他者との関係において否定的な経験を持つと，不安定な IWM がさらに強化されると考えられる。
そして，新生児への愛情に関する変数間の関連を調べるために，胎児期の愛情および抑うつ変数を統制した上で，養育者に関する IWM の諸変数，幼少期の代理対象および現在の夫婦関係を投入した。すると，代理対象の存在と良好な夫婦関係ともに新生児への愛情について肯定的な影響を与えることが示され，仮説の一部が実証された。
その一方で，想定外の結果として語りの一貫性が新生児への愛情を阻害していた。その理由として，入院中は手厚い医療手当を受ける時期であり，抑うつも高い不安定型はより一層多くのサポートを受け取ることが推測される。また，妊娠時の IWM と乳児の愛着の縦断研究において，妊娠期に安定型であった母親の子どもの 1 年後の愛着は安定型である傾向が見られたのに対し，不安定型の 1 年後の子どもの愛着は関連を示さなかった（Fonagy et al., 1991）。このことより Fonagy et al.(1991)は生後 1 年間の子どもとの相互交渉により，母親の IWM が発達した可能性について考察した。それでも，妊娠時から既に胎児との相互作用は生じるとはいえ，本研究で産後間もない多数の不安定型の IWM が更新されたかどうかについては確かでない。一般の母親データから，産褥期の子どもへの愛情得点が生後 1 年時には有意に低減しており（永田，2011），今後の子どもへの愛情の推移について，IWM だけでなく実際の養育態度を含めた追跡調査が必要である。
④本研究の限界
本調査の限界として，対象者数が少なく調査の時期ごとに人数が減少しており信頼性は高いといえない。健常な母親が対象であり著しく不適切な養育に関する事例の理解や援助への適用は限定される。また，代理対象の有無について，AAI の逐語録から抽出しており外在基準を用いていないことと，AAI で代理対象について詳細に尋ねられず順序尺度の作成が困難であった。さらに，前方視的な調査方法により因果関係を検証したが，AAI に関しては過去の記憶の想起であり抑うつの影響を受けたおそれがある（Roisman et al. 2006）。

５．主な発表論文等
〔雑誌論文〕（計　5 件）

1.　高橋靖子・瀬地山葉矢・本城秀次(2014)．乳児の気質と母親の育児不安との関連：妊娠時の愛着表象を防御因子として．小児保健研究，**73**(3)，429-436．［査読有］
2.　高橋靖子・安藤知子・五十嵐史帆・大橋奈希左・佐藤ゆかり・藤井和子・細江容子・増井　晃　(2013)．上越教育大学における“子育て支援の会”の特徴と今後の課題．CAMPUS HEALTH，**50**(3)，203-208．［査読有］

〔学会発表〕（計　5 件）

1.　高橋靖子・瀬地山葉矢・本城秀次(2013)．妊婦の愛着表象と代理対象との関連．発達心理学会第 24 回大会論文集，128．(2013 年 3 月 15 日，明治学院大学)
2.　高橋靖子・瀬地山葉矢・本城秀次(2012)．妊婦の愛着表象と子どもへの感情との関連．日本発達心理学会第 23 回大会論文集，217．(2012 年 3 月 9 日，名古屋国際会議場)

〔図書〕（計　2 件）

高橋靖子(2013)．悩みを抱える力とは．木之下隆夫(編著)『学校支援のための多視点マップ始め方・使い方』　遠見書房，118-123．

〔産業財産権〕
○出願状況（計　0 件）
○取得状況（計　0 件）

〔その他〕
ホームページ等
なし

６．研究組織
(1)研究代表者

高橋　靖子（TAKAHASHI，Yasuko）
上越教育大学・大学院学校教育研究科・准教授
研究者番号：22730536

(2)研究分担者
なし